

ふるさとから学ぶ個を育て、地域をつなげる社会科学習

～地域教育力の活用と防災教育の開発を通して～

梶本 久子

ふるさとを愛する個を育てたいと考え、地域にこだわり、地域と連携した教育を中心に社会科学習をすすめてきた。ふるさとに学ぶとは、地域に関わることから、教材への出会いを、その中から見出していくことであると考えている。つまり子どもたちが、自治体、大学、企業やNPO等の様々な人と交流を通じて、豊かで多様な学習をできるようにし、社会的事象を考えるきっかけを作るということである。ふるさとである和歌山は、自然豊かであるということと比例して、様々な自然災害も多い地域である。そんなふるさとから防災を学ぶということは、自然災害から守る、つまり、何が必要とされているのかという気づきを与え、実践していくというきっかけを学習できるのではないかという思いから、本実践を実施した。その結果、子どもたちは地域の課題はもちろん、地域のよさを学び、自分たちがまちづくりの主役であるという主人公意識を持った。また、地域の連携を効果的な場面で取り入れたカリキュラムを構成することで、多様な集団・組織の中でコミュニケーションや豊かな人間関係を築き、成長を果たしていく子、ふるさとに学ぶ子（個）を育むことができた。特に防災を取り上げた単元では、和歌山の防災の現状に大きな使命感をもち、学びを深めることができた。

キーワード：ふるさと、地域教育力、防災教育、ひとり学習、学び方を学ぶ、

1. 地域教材活用の有効性

子どもたちの生活の舞台である地域の中から教材活用していくことは、子どもたちの「もっと知りたい」「もっと調べたい」という追究意欲を高めることにつながる。また、子どもたち自身が地域社会の中でさまざまな実情に目を向け、そこに暮らす人々との直接的なかかわりをもつ中で、学び、自らの思いや願いを表現し、問い続ける主体的な活動が、地域社会に強い愛情や誇りをもつことにつながると考えている。こうした地域教材活用の有効性を、以下の4点でとらえた。

- ①子どもたちにとって身近であり、親近感を持ち、その中で生活することのよさを感じることができる。
- ②見学や調査を通して直接経験による実感を伴った認識が可能であり、様々な人と出会い、資料や情報を収集するなど、多様性をもって地域の教育資源を活用することができる。
- ③実生活にとって切実感があり体験や知識を生かした思考・判断の場面を設定することができる。
- ④地域社会への愛着を育成でき、地域社会の一員としての自覚を高め、地域社会の発展を願う気持ちを培うことができる。

これら4点が、地域に学ぶことの有効性であり、これらの条件を満たす「ふるさと和歌山つながりプロジェクト」を1年間の学習の柱として計画した。

このプロジェクトを通し、地域の多くの教材と出合わせることで、子どもたちは一面的・主観的な見方、考え方から、多面的・客観的に深化していった。その中でも特に有効性を感じた②の“地域教育力活用”について、防災教育を中心に詳しく述べたい。

2. 「絆・結・束」を地域DNAに

地域の人と直接触れ合うことにより、出会った多くの方が、学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれる。そのことが子どもたちにとって、大きなエネルギーになる。こういった出会いの一つひとつが、人々の願いや工夫を知るきっかけになり、その思いに応えようと子どもたちも、追究姿勢に深まりが出て、学び合うことができる。出会った一つひとつの地域の教育力を「絆で結んで束ねていく」つまり、点と点（絆と絆）が線で結ばれ織りなし束ねていくことが地域DNAとなると考えた。

2.1 「絆」和歌山県庁・和歌山市役所

4月から子どもたちは多くの自治体の方に出会った。学習を進めていく上で、出会わせ方を工夫し、どの方にも固有名詞で呼べるように、出会いを大切にしている。防災の学習は知識だけで終わることが多く、子どもたちにとっても、学習をすすめていく上で難しいと言われている。4年生という発達段階から考えると、公的施設の働き、公助の理解、自助の確認、地域の中で共助をしなければならない人や場所などをどこまで把握できるかなど、課題となる面が多々あった。それを一つ一つ確かなものにしていくため、和歌山県・市の総合防災課の方々の所へ何度も訪ね、交流し、多くのことを教えていただいた。何度か交流をする中で、学んだことや調べ学習、話し合いの結果を直接伝えたいという思いを持ち、提案書作りへとつながっていった。そのことにより「和歌山県・和歌山市」に親近感、共感をもち、多くの和歌山の人伝えたい使命感やこれからの生活に

生かしていこうとする意識が育つのではないかと考えた。1学期の「くらしを支える水」の単元でも和歌山市の水道局の方々、紀の川大堰、国土交通省の方など多くの方と出会い、学びを深めることができた。そういった活動の中で、繰り返しコミュニケーションをとることにより、お互いが親近感を増しただけでなく、早い時期から、和歌山の安全を守る方々の思いや願いに気づくことができた。また、2学期も県や市など自治体の方をはじめ、語り部、稲むらの火の館の方、NPO、大学の防災教育に携わる人、大学生やボランティアなどから教わる今まで知らなかった事実次第々々に出合わせることで驚きやハテナを呼び起こし、学習問題を追究していくエネルギーとなった。また、たくさんの方と関わりながら、和歌山の安全を守る人たちの思いや願いをさらに深く学ぶ機会となった。また、和歌山城観光センターオープニングセレモニーの招待を受け、和歌山市長から「頑張って浜口梧陵さんの勉強をして、去年のクラスのように和歌山市の防災の提案書を作って見せてください」という言葉をいただいた。子どもたちにとって「市長さんに提案書をもっていく」という思いが高まり、意欲的に学習をすすめる大きな原動力となった。

2. 2. 「結」 保護者・地域の方々

「学びの質の高まり」とは、ひとり学習と全体学習が相互に関連しながら、さらに深めていくことだと考える。しかし、ひとり学習というと「調べる」だけで満足する子どもも多く、「調べたことをもとに考える」ことができる子どもは少ない。年間を通して、地域素材の活用や生の声を聞き取る活動を大切に、子どもたちが自分とのかかわりから事象がとらえられるようにすることで、自分の考えをより深めることができる。「防災教育」は、見えにくく切実感が出にくい教材である。実際、保護者や地域の人など多くの人にインタビューやアンケートする中で子どもたちと保護者や地域の方々の考えには大きな温度差があった。そこで、まず、家の人の考えを変えたい、多くの人に防災を伝えたいという「使命感」がきっかけとなった。使命感をもって、様々な活動を進める中で自分たちの住んでいる地域への思いをより強く持ち、自分の思いや考えを確かなものにするのができた。そして、いろいろな立場の人と接し、学校だけでなく、現実の社会とのつながりを持ったことで、より一層、自分の考えを吟味することができ、4年生なりの学び方を身につけたように思う。そして、今後も意欲的に追究し、自分で問題を発見し、問題解決の過程でいきいきと学び合うことで、自分を見つめなおし、未来への生き方へとつなげていける子にさせたいと考えている。また、地域の方に学ぶことにより、人々との共感、多くの人々の心を結んでいくことが地域の方々と結んでいくことにもつなが

ったと感じた。

2. 3 「東」 大学・地元企業の方々

南海地震は30年以内の発生確率60%、30年以内とは、明日起きるかもしれないが、30年後に起きるかもしれないということでもある。だから、明日の備えが30年後、100年後にも生かされなければならない。しかし、継続的に備えることは大変難しい。つまり、課題として、継続可能な取り組みや提案、宣言があげられる。大学の防災教育センターでは教授や学生たちから多くのことを学んだ。特に一緒に取り組んでいる中で「継続可能な提案をしたい」という思いが子どもたちの中に強くなり、より多くの人に自分たちの提案を発信することへとつながった。

子どもの考えは表現することによって表出され、目に見える形となる。そうした表現方法や発信の場の充実や工夫が大切であると考えている。そして、子どもが自分だけでは思いつかなかった見方や考え方を発見できることが社会科の「考える面白さ」なのである。地元企業や大学生とのコラボレーションのカフェ事業、さらに子どもたち自身が地域素材をもとに企画運営するカフェなどを中心に「ふるさと和歌山つながりプロジェクト」の取り組みを発信した。和歌山市のジオラマを用いてのプレゼンテーション、和歌山県や和歌山市の防災の施策の紹介、防災クイズ、劇などのワークショップ活動など様々な表現活動を行った。繰り返し、多くの場や人の前でプレゼンテーション活動を行うことによって、表現力の向上等、子どもたちの大きな変容が見られた。

また、社会科・総合的な学習を通して地域の未来に対する強い思いを校内外の多くの人に発信することができた。そして、保護者・地域住民対象のアンケートの結果、保護者からは、地域の多くの方々が、子どもたちの学習を高めてくれる貴重な指導者になってくれたことへの感謝や和歌山の防災のよさや課題を発見したという意見をもらった。また、地域住民からは子どもたちの強い思いが、自分たちも意識を高めなければという啓発につながった意見も多く寄せられた。

1年を通して多くの地域の方への聞き取り調査から、和歌山の防災の願いを実現していく地域の人々の工夫や努力について考える力を育った。また、発信という形で関わってくださった多くの方々を招待したり、提案書で説明する機会をもったりしたことで、出合った一つひとつの地域の教育力を「絆で結んで東へつなぐ」ことの第一歩となったと感じた。

3. 授業実践（めざせ！現在の濱口梧陵）

3. 1. 単元目標

・「濱口梧陵」が地域の人々の生活を向上させるために工夫や努力をしてきたことを理解し、そうした歴史をもつ自分たちの地域に対する誇りと愛情

をもつ。

- ・地域の人々の安全なくらしを支えるために、防災対策についていろいろな組織や他地域の人々の協力を得て、組織的・計画的に行われていることがわかる。

3. 2. 「地域教育力」の活用

本単元では地域教育力を活用し、学びを深めることができた場面が多くみられた。その中でもA児の作文を中心に3例挙げる。

- ・和歌山県の総合防災課とともに

和歌山県の総合防災課 D さんに案内してもらい、防災対策会議室に入った瞬間、独特の雰囲気や圧倒され緊張感でいっぱいになり、また、普段見ることのない場所に行けたことに興奮し、これからの学習に思いを馳せていた。また、いただいた資料をもとに話し合い、資料だけで解決できない問題については、後日、教室に来ていただき、じっくりと教えていただく時間もとった。

ヤッター！

県庁の南別館は耐震と免震に分かれていて地震に強いということがわかりました。だから 42 億円かかっても一命をとりとめるためなら、納得できると思いました。普段は入れない会議室へは海上保安部の席に座り、海上保安部の気分になりました。帰って来てから、B 君が「〇〇部」という三角のネームプレートみたいなのをつくったらいいと思うって話していたので、あとから自分の席の「和歌山市安全安心部」という名札を机において「部長」と書いたら、これからもっと意見を言って、アイデアも出さなきゃと思った。D さんがわからなかったところを答えに来てくれると聞いてすごうれしかった。

特に、和歌山市との違いや台風 12 号のこと、串本町の防災対策を聞いてみたいです (A 児)

- ・和歌山市の防災について

和歌山市の防災総合対策課の仕様の様子や実際の取り組みを見せていただくことにより、市の防災対策の工夫や苦勞を知り、それをもとに地域をよりよくする考えを深めることができるようになった。

また、後日、教室でも防災グッズ作りなどを教えてもらったことにより、「おうちの人に学んだことを伝えたい」と思いが強くなっていった。今までは、獲得した知識や技能を表現するにとどまり、十分に考えを深めることに結びついていないことがあったのだが、校区別のそれぞれのハザードマップを持って帰り、防災家族会議をする子、一緒に和歌山市の防災無線に耳を傾ける子、地域の人へのインタビューをする子、グッズ作りをする子などが出てきた。

周りの人に和歌山市の防災の対策や工夫を伝えることで、実際に、人々の願いや取り組みを意識し始める子も出てきた。市の総合防災課の方とのかわりなどを通して、地方公共団体の仕組みや役割、和

歌山市の防災にかかわる人の思いについても気付くことができた。

変わってきた！

前から調べ学習は好きだったけど、今は防災のことを家の人に伝えるって気持ち大きい。今まではお母さんたちの方が知っていて、そのことについて教えてもらった感じだったんだけど、(水の勉強のときも、特に国語は本読みをしているときとか)今は自分のおうちの人に教えてあげなくちゃって思うことが多くて、お母さんや大人の気持ちを動かしているって感じがして、いつも「へえ～」とか「初めて知った」って言うてもらえるのがうれしいです。もっと調べ学習をして、驚かせてみせたいと思いました。この前京都の美術館に行った時も、和歌山市の総合防災課の T さんの言ってくれたことと京都市を比べた。それに、T さんが「和歌山市の防災にはもっと防災意識を高める教育が大事」って言うてくれたことが頭に残っています。(A 児)

- ・大学とのコラボ

大学の防災サークルの代表が串本町出身で東海東南海南海地震に対し、大きな危機感を感じ活動していたため、学生たちと一緒に勉強する機会を作った。

学生と学ぶことで、学生が子どもたちの思いを大切に聞き役でいてくれたり、東日本大震災を経験した方から貴重な意見を聞いたりすることができた。

また、大学のデジタルドームシアターで東日本大震災の 2 カ月後の町の様子を一つ一つ検証しながら観ることができた。大きなタンカーが堤防の上のりあげている映像や瓦礫の山、高いマンションの窓ガラスが無くなっている様子など、どの映像も迫力があり心に残ったようであった。その後、サークルの学生とともに、防災教育センターにて、教授から被災地の様子、防災対策などの授業をうけた。

被災地の様子に心を痛め、防災対策の話に身を乗り出し一生懸命メモをとる姿が見られた。最後に「防災では最悪なことをイメージしなければならない。イメージできる力が必要、しかし、大人や保護者の人が一番イメージできていない」という言葉をいただいた。その言葉に多くの子が大きくなはずいた。

その後「お母さんが防災の話を知ってほしいようになったから、今度は他の人に伝えることにしたよ。やっぱりぼくみんなを助ける浜口梧陵さんみたいになりたいって思ったんだ」と話す子がいた。その言葉を聞いた直後、大きな拍手があがった。子どもたちにとって学習が深まったと感じた瞬間だった。

サイコーに勉強になった。

和歌山市が日本一の防災市町村を目指すためには、お母さんや大人の人の教育も必要だし、今、附属の 4A だけが一生懸命防災をしてもほかのクラスはしていないし、こうなると教育を提案してい

くことが大事だと思った。今日教えてもらったように和歌山防災3カ条をつくるしかないと思いました。『津波でんでんこ』の言い伝えも大切だけど、教育がないと此松先生が言ってくださったみたいにイメージ力や対応力がわかなくて、百年後には同じ間違いを繰り返す人がいると思うからです。(A児)

1. 単元の考察

4. 1 対話型学習の中で

子どもたちの話し合いから「百年後のふるさと和歌山を大津波から守る〇〇を」の〇〇を三つの宣言を考え、多くの人に伝えていくことになった。

三つの宣言については、①高台にダッシュ②最悪をイメージしようと二つは簡単に決まったが、三つ目の宣言についてはなかなか決まらなかった。意見交換の際、「防災教育力をつけます」「体で覚えるほど避難訓練をします」「15m以上の堤防を作ってもらいます」の3つに分かれた話し合いを位置付けた。3つの意見の根拠を比較させることによって、子どもたちが課題に対していろんな角度から考え、意見交換する中で、多くの方から得た断片的な知識を概念的・統括的な知識に高めるための練り合い、高め合いの場になるよう支援した。焦点化の場面では「浜口梧陵さんにつながっている」という意見から、グループ学習に入り、友達のと比べ、共通点・相違点を見つけ考え合うことができた。また梧陵さんの視点で考え、振り返ることで焦点化することができた。

また、教材と向き合い、じっくり自分の考えが持てるようひとり調べをする時間を保障した。子どもたちから「もう一度インタビューに行かなければ」「市長さんにわたす提案書にのせるんだ」「お母さんを変えさせる」という強い思いが見られた。その思いを大切に、いろいろな立場からの話を聞くこと時間を設定した。また、周りの人など多くの人にインタビューやアンケートすることで意欲的に一人学習を進める姿がみられた。これまでの調べ学習が話し合いの中で生かされるような話し合いになった。子どもたちの考えの変容や深まりもみられ、焦点化され吟味がうまれたと思う。ひとり学習の時間を十分保障した分、自分の考えの出したい思いが先行しがちなところも見られた。それだけでは、新たな発想や思考を創造し、学び合いの質を高めることにはなり得ない。互いの考えをしっかりと受け止め、自分の考え方と比較しながら思考を重ね、自らの考えをさらに深めて表現しあうことによって、新しい価値が生み出されると考えている。そのためにも、教師の「問い直し」や「ゆさぶり」など多くのみとりや支援を大切にしていきたい。

4. 2 みとりと支援

子ども一人一人に目を配り、みとり、評価するこ

と、そして、その評価に基づいて、その個をどう育てたいかという視点を持ち、具体的な姿を思い浮かべて個に応じた指導を繰り返すという姿勢が重要だと感じている。本単元でも作文やノートでの対話、学びの途中の記録、発言、やりとりの中から個に応じた支援を続け、学習意欲を喚起できるようにすることが次へのステップになると考えた。

その中で、多くの人々の思いや願いに気づくことができ、和歌山の防災に対する熱い思いの発言へとつながった。

5. 成果と課題

ふるさと和歌山は宝物

私は4月からふるさと和歌山の勉強をして、どんどん和歌山のことが好きになりました。特に防災の勉強をして、その思いが強くなりました。武田さんや土肥さん此松教授、市長さんなど、みんなが和歌山を守ろうとして、ふるさと和歌山を大切にしていることを知ったからです。でも、和歌山県民はまだまだ、防災意識が高くありません。だから、私たちがみんなの防災意識を高め、一緒に防災対策について考え広めていかなければいけないと思っています。そして、どうしても東海東南海南海地震から大好きな宝物のふるさと和歌山の人々を守りたいという気持ちになりました。

子どもたちは、東日本大震災に心を痛め、多くの人に防災を伝えたいという思いで、地域と人とともに学びを深めた。特に家の人や地域の人意識を変えたいという「使命感」をもったことがきっかけとなり、地域を身近に感じまちづくりの一員としての思いを持った。しかし、切実感を持って学習したかということ、現実性や有効性の面からの練り上げが不十分であった。意図的すぎる意見になったり、安易に一つの意見になびいてしまったりすることにもなった。相手の考えをじっくり吟味し、疑問をもてるような子どもを育てるためにも、授業に対する楽しみ方を変える「素朴な目」を大切に伸ばしていくことが大事だと感じた。また、防災の学習を通して“続けること”の大切さを学んだ。子どもたちの防災に対する思いは強く、単元が終わった今も学習を継続している。また、出会った方々とは、その後も交流を続ける予定である。今後も、社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、防災の輪を広げ、続け、深めていくことが地域DNAとなると考えている。

参考文献 文部科学省(2008)「小学校学習指導要領」
安野功(2006)「社会科授業力向上5つの戦略」
東洋館出版社

(2010)和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 34

(2011)和歌山大学教育学部附属小学校紀要 No. 35